

人文学報

No.519-12

中国文化論

清代中期の旗人官僚と満州語力

- 乾隆帝の満州語指導を中心に …………… 小松原 ゆり 1
- 満文翻訳作品における漢語語彙“茶湯”の解釈…………… 荒木 典子 17
- 『紅樓夢』に見られる“茶”に関連する動詞について…… 劉 森 27
- 満洲の中国語教育者秩父固太郎およびそのラジオ講座（上）
…………… 代 珂 47
- 民国期児童雑誌と『コドモ』『マイ・マガジン』…………… 佐々木 陸 67
- 彙報 …………… 95

東京都立大学 人文科学研究科

2023年3月

満文翻訳作品における漢語語彙“茶湯”の解釈

荒木 典子

0.はじめに

1644年の入関以前から、満洲族は漢文書籍の満文訳に熱心に取り組んでいた。多分野にわたる文献が翻訳され、その中には数多くの文芸作品も含まれている。寺村(1994:39)では、これらの漢語文芸作品のうち、『金瓶梅』と『西廂記』の翻訳上の問題点を取り上げている。両者はいずれも近代漢語の範疇に属す作品で、当時の満洲族が習得した清代北京語とは必ずしも一致しない言語的特徴を持っている。近世漢語語彙、俗語、歇後語の訳出に当たり、訳者の知的レベル、異種言語翻訳の限界、(漢語話者の)日常言語が訳者の学んだ言語に継承されなかったこと、歇後語のような文化がなかったことが原因となり、誤訳が生じていることが指摘された^[1]。現在の中国東北部から来た満洲族の生活と漢語文芸作品の登場人物たちとの生活は、もとよりスタイルが異なるので、このような現象は枚挙にいとまがないだろう。近世漢語独特の語彙や凝った言葉遊び以外にも、訳出にあたり困難が生じる場合があると考えられる。今回は、“茶湯”という語彙に注目し、『西廂記』、『金瓶梅』の満文訳での訳し方を比較した。用例数は多くはないものの、両作品の訳出状況には違いが見られる。その原因は文脈の支えにあると考えられる。

1.辞書における“茶湯”の解釈

“茶湯”は辞書では以下のように記述されている。

- ・①食べる状態にした“茶面子”。②湯茶。(愛知大学『中日大辞典』(第三版))
- ・茶水。也泛指一般飲料。(団結出版社『近代漢語詞典』)

『中日大辞典』の①“茶面子”をさらに調べると以下のような説明がある。

・ウルチキビの焦（こがし）。ウルチキビの香煎：お茶に溶かしてすりごま・砂糖または牛乳などを入れて飲む。

“昨日他姨娘家送來的好茶麵子，倒是對碗來你喝罷。”（『紅樓夢』第 75 回）

（昨日よそからいただいた上等の香煎を作ったからお上がりなさい。）

（愛知大学『中日大辞典』（第三版））

“茶湯”は、日本語の「湯茶」のような、茶を筆頭とする飲み物類のことだが場合によっては“茶面子”という特定の飲み物を表すこともあるようだ。

2. 『満漢西廂記』（中央民族大蔵本）^[2]の“茶湯”

漢文に“茶湯”は 2 例見られる。満文ではいずれも *cai šasihān* と訳している。『清文彙書』ではそれぞれ以下のように解釈している。

cai: 茶。

šasihān: 和作料做的湯（調味料を混ぜて作ったスープ）。

1) 這錢也難買柴薪，不穀齋糧畧備茶湯。

ere jiha, moo yaha udara de, hono isirakū buda jeku de tesurakū ainame cai šasihān de baitala. (1/14b-4)^[3]

（この金は木炭を買うのにはなお足りず、食料には足りず、どうにか茶やスープに使って。）

第二章、張生の歌う【上小楼】内で発せられる。「旅の道中で持ち合わせがない、ほんの少しで“茶湯”ぐらいしか買えませんが」と言いながら、普救寺の長老、法本に一両の銀を手渡す場面である。とはいえ、それで部屋を借りる交渉が成立しているのだから、それなりの金額なのだろう。

2) 想着這異鄉身，強把茶湯握。

ere encu gašan-i beyebe gūnime hacihiyame cai šasihān-i hetumbumbi. (4/6a-3)

（この他郷にある身を思い、つとめて茶やスープで過ごす）

第十三章、張生の歌う【寄生草】内で発せられる。第十二章で、鶯鶯から「今夜会いに行く」という手紙を受け取り、待っているがなかなか来ない場面である。ここでは“茶湯”は粗末な食事を代表しているようだ。

以上の例から、『西廂記』の“茶湯”には、粗末な食事、腹にたまらないものというイメージが見受けられる。なお上記 2 例はドイツ・バイエルン国家図書館所蔵本^[4]でも *cai šasihān* と解釈している。しかし、満文 *cai šasihān* も漢文における“茶湯”と同じニュアンスだったとは限らない。『西廂記』には 2 例しかないので、次節では『満文金瓶梅』の例を見ることにする。

3. 『満文金瓶梅』^[5]の“茶湯”

16 例見られる。1 例は *cai šasihān*、14 例は *cai* と解釈し、もう 1 例は別の訳し方をしている。『西廂記』の 2 例はいずれも概念的な“茶湯”だったが、こちららは実体を伴う。出された状況から、茶なのか、食事の一部としてのスープなのかを考えてみたい。

3) 伺候茶湯脚水, 百般殷勤扶持。(12/12b-7)^[6]

cai šasihān bethe oboro muke be belhefi, tanggū hacin -i kuturšeme takūrabumbi.(12/25a-2)^[7]

（茶やスープや足を洗う水を準備して百種類の手を尽くし懇慫に仕える）
潘金蓮はある日、下男の子童と関係を持つ。それが露見し、西門慶が金蓮を激しく折檻し、春梅のとりなしでようやく許された。その翌日の夜、潘金蓮は、誕生日の宴会の後に部屋に来た西門慶の世話をする。この 1 例のみ、*cai šasihān* と解釈しているが、食事は済んでいるので改めて「スープ」を提供しているとは考え難い。

4) 便呼丫頭, 打發茶湯點心與劉婆吃。(12/18a-10)

sargan juse be hūlafī, *cai* efen benjibufi, lio mama de ulebufi. (12/27a-8)

(下女たちを呼び、茶と菓子を持って来させ劉婆に食べさせて)

潘金蓮は李桂姐のまじない(西門慶に頼んで潘金蓮の頭髮を一束手に入れ、靴の中に敷いて毎日踏む)により体調を崩す。そこで出入りのまじない師、劉婆に助言を乞い、その後茶菓を振舞う場面である。

3),4)は第 12 回に見られる例で、提供しているのはいずれも潘金蓮である。

5) 茶湯畢, 西門慶吩咐玳安回馬家去, 明日來接。(17/2a-4)

cai omime wajiha manggi,..... (以下略) (17/2b-6)

(茶を飲み終えた後、.....)

下男の玳安が、周守備の屋敷で宴会に参加していた西門慶を李瓶児の家に送り届けた場面である。玳安は西門慶を残し帰宅する。ごく短い時間のできごとで食事まではしていない。

6) 茶湯已罷, 丫鬟安放褥墊。(17/9a-8)

cai omime wajiha manggi, sargan juse sishe sekthe. (17/15b-7)

(茶を飲み終えた後、下女たちが敷物を敷いた。)

西門慶の訪れが途絶え、体調を崩した李瓶児のもとへ医者 of 蔣竹山が診察に来る場面である。まず茶を飲み、すぐに診察の準備を始めている(“褥墊”は漢方医が脈を診るときに使う道具)。よって、ここでは食事をしてはいない。

7) 婦人盛妝出見, 道了萬福, 茶湯兩換, 請入房中。(17/10a-1)

li-ping-el ambula miyamifi tucifi dorolome acaha. cai juwe mudan omiha manggi, dorgi boode dosimbufi (17/17a-3)

(李瓶児は盛大にめかし込んで出て来て挨拶をした。茶を二回飲んだ後、奥の部屋に招き入れ...)

例 6)の続き。李瓶児は後日、蔣竹山を招いてもてなす。まず茶を飲んでから、宴会の準備がしてある奥の部屋へ移動する。食事をするのはこの後である。

8) 茶湯獻罷, 階下簫韶盈耳。(49/4a-6)

cai benjifi omihabici, terkin-i fejile ficakū ficame (49/8a-2)

(茶が届き飲んでしまうと、階段の下で簫を吹いて)

西門家に宋御史、蔡御史が訪ねて来た。挨拶の後、茶が獻じられた場面である。その後宴会が始まる。食事は宴会で摂るのであろう。桂遇秋(2001)^[8]によると、客人をまず茶でもてなす“客来敬茶”の場面は、『金瓶梅』において183か所あるといい、そのうちの一つに8)が挙げられている。見たところ、このような場合に出てくる茶は多くが“茶湯”ではなく“茶”と書き表されている。

9) 説畢, 茶湯兩換, 作辭起身。(65/3b-7)

gisureme wajifi cai juwe jergi omifi , fakcara doro arafi geneki serede (49/8a-2)

(言い終えて茶を二回飲み、別れの挨拶をして、行きたいと言うので)

黄主事が西門慶の家を訪ね、打ち合わせをする場面である。ここでは茶だけ飲んで帰っている。

10) 明早在朱太尉宅前取齊, 約會已定, 茶湯兩換, 西門慶告辭而回。(70/11a-5)

jai inenggi erde ju-tai-ioi -i boode acaki seme boljofi, cai juwe mudan omiha manggi, si-men-king fakcara doro arafi bederehe.(70/22a-6)

(翌日の朝、朱大尉の家で会いたいと約束し、茶を二回飲んだ後、西門慶は別れの挨拶をして帰った)

西門慶が何千戸の屋敷を訪ね、打ち合わせをする場面である。ここでも茶だけを飲んで帰っている。

11) 吳大舅等各相見敘禮畢, 各敘寒溫, 茶湯換罷, 各寬衣服。(72/11a-1)

u amba nakcu se de dorolome acafi, cai omime wajiha manggi, gemu etuku sufi tecehe. (72/19a-3)

(吳大舅らに挨拶し、茶を飲み終えた後、みな服を脱ぎ座った)

西門家での歓迎会にやってきた何千戸を出迎え、まず出席者に茶を振舞う場面である。飲んでからようやく上着を脱ぎリラックスしている。到着して最初にお茶を出すらしい。この後宴会が始まり、食事はそこで摂る。

12) 茶湯吃罷, 安郎中方説 (72/12b-1)

cai benjifi omiha an-lang-jung hendume (72/22a-3)

(茶が出て来て飲んだ。安郎中は言った)

安郎中が西門慶の家を訪ねてくる場面である。安郎中は用件を話し終えてからまた茶を飲み、帰る。食事はしていない。

13) 須臾就是茶湯。滌盞乾淨，濃濃的點上去。(73/12b-5)

goidahakū fuyefi hūntahan be bolgo fufi cai abdaha be labdu sindafi (73/22a-9)

(ほどなくして湯がぐらぐらと沸騰し、湯呑みをきれいにぬぐい、茶葉をたくさん入れて)

潘金蓮が自室で飲むために春梅に命じて茶を淹れさせる場面である。“茶湯”を動詞 *fuye-* (ぐらぐらと煮え立つ) で訳している。茶を抽出するための湯が沸いたことを指す。また、“滌”(洗浄する)を *fu-* (ぬぐう、拭く) としている。

14) 分賓主坐下，左右獻上茶湯。(75/6b-3)

antaha boihoji doroi tecefi, hashū ici ergi urse cai benjifi omiha.(75/11a-6)

(客と主人の礼によりそれぞれ座り、左右の者たちが茶を届けて来て飲んだ) 荊都監が西門慶の家を訪ねて来た場面である。西門慶はこの後出かける用事があったため、用件が済むと再び茶を飲み、荊都監はすぐに帰っていく。それが例 15)である。

15) 茶湯兩換，荊都監拜謝起身去了。(75/8b-3)

cai juwe jergi omifi, ging-du-giyan dorolome baniha bufi aššaha manggi (75/13b-1)

(茶を二回飲み、荊都監は礼をして感謝し身を起こした後)

先にも述べたが、例 14)と同様な場面 (お客が来て主客分かれて席に着き最初に茶を出す) で“茶湯”ではなく“茶”が出てくる場合もある。用例を一つだけ挙げる。

15') 叙畢禮數，分賓主坐下，獻茶已畢。(49/2b-6)

dorolome acafi antaha boihoji doroi tehe. cai omime wajifi (49/4b-4)

(挨拶して適切に客と主人の礼で座った。茶を飲み終えて)

16) 茶湯兩換，荊都監起身。(78/1a-9)

cai juwe jergi omiha manggi, ging-du-giyan ilifi genere de (78/2a-1)

（茶を二回飲んだ後、荊都監は立ち上がり行くときに）

例 14)と同様、荊都監が西門慶の家を訪ねて来た場面。荊都監はすぐに帰っていく。

17) 分賓主, 而坐茶湯上來。(78/19a-2)

antaha boihoji doroi tefi, cai omiha manggi (78/36a-4)

（客と主人の礼により座り、茶を飲んだ後）

例 14),16)と同様、荊都監が西門慶の家を訪ねて来た場面。この後、用件を話してから宴が始まる。食事はそこで摂る。

18) 須臾, 茶湯已罷, 衙内令左右 (92/5a-4)

goidahakū cai omime wajifi, gungdz hashū ici ergi urse be hūlafī (92/10a-2)

（ほどなくして茶を飲み終え、李衙内は左右の者どもを呼び）

陳敬濟が、孟玉楼の弟を騙り、李衙内（西門慶の死後、孟玉楼を娶る）の屋敷を訪れる場面。茶を飲むとすぐに孟玉楼の部屋へ移動する。

4.小結

『金瓶梅』では“茶湯”16例中14例が、cai と解釈されている。残り2例の内の一つである例 13) は、動詞で訳しているが、文脈から茶を淹れていることが明らかで、漢語語彙“茶湯”の解釈②と合致している。例 3)のみ『満漢西廂記』のように「茶とスープ」としている。ここで“茶湯”の出て来た状況を参照すると、最も多いのは西門慶と仕事関係の知り合いや役人が面会する場面で、9例ある(例 8,9,10,11,12,14,15,16,17)。これらはおよそ、客人到着→主人が出迎えて挨拶→主賓分かれて着席→主人自ら或いは召使による茶(“茶”、“茶湯”、“○○茶”)の提供(場合によっては複数杯)→用件があれば話す→宴席へ移動、あるいは客人帰宅、という流れの中で行われる。例 6)7)18)もこれに準じた流れがある。描写の定型化が、訳語の安定(漢字の意味に惑わされず、その時に出てくるのにふさわしい事物を訳に当てられる)に一役買っているので

はないだろうか。

* この研究は JSPS 科研費 19K00578 の助成を受けたものです。

注

- [1] 誤訳の例: 媒人婆上樓子老娘好耐驚耐怕的。(『金瓶梅』第 21 回) jala-yabure-hehe taktu de tafambi sere balame sakda-eniye bi absi gelehe (仲人婆さんが二階に登ると言うけれど老娘の私は本当に恐ろしかった) “好耐驚耐怕的” の“好”は程度を強める働きを持ち、“耐驚耐怕的”(驚きや恐れにたえる)を強調する、つまり「ちょっとやそつとでは驚かぬ」の意味であるが満文は逆の意味に取っている。(寺村(1994:42))
- [2] 満文訳『西廂記』の中でも数多く伝来している康熙 49 年序刊本のうちの一つ。満漢合璧で全四卷十六章。清初の金聖嘆批評本が底本になっている。
- [3] 左から巻数、葉数、表裏を表す。例 2) も同様。
- [4] 全五巻の満漢合璧抄本。他の満文『西廂記』同様、金聖嘆批評本を底本としているが、珍しいことに全二十章を翻訳している(その他の訳本は管見の限りすべて十六章までである)。孫書磊(2014)によると、満文訳はその他の訳本とだいぶ異なっている。
- [5] A Manchu Edition of CHIN P'ING MEI Chinese Materials Center, Inc. San Francisco 1975 を用いた。康熙 47 年序刊本の影印本である。
- [6] 筆者は、『満文金瓶梅』の底本を崇禎本系統と考えている。テキストには、天津図書館蔵『新刻繡像批評金瓶梅』影印本(2012 年、線装書局)を使用した。
- [7] 左から回数、葉数、表裏を表す。以下同。
- [8] 調査対象は張竹坡本。

参考文献

桂遇秋(2001)「『金瓶梅』中の茶文化（続）」、『農業考古』第4期: 38-43頁。

孫書磊 (2014)「巴伐利亚図書館蔵『合璧西廂』考述」、『文化遺産』第4号、
中国社会科学院文学研究所: 81-86頁。

寺村政男(1994)「満洲旗人による近世漢語の繙訳の実態—金瓶梅と西廂記を中心に一」、『中国語学』第241号:39-48頁。

◇以上の他、早田輝洋先生入力 of デジタル版『満文金瓶梅』を大いに活用した。

2023年3月15日印刷
2023年3月30日発行©

「人文学報」 第519-12号
非売品

東京都八王子市南大沢1丁目1番地

編集・発行者 東京都立大学 人文科学研究科
人文学報編集委員会

代表者 源川 真希

印刷 藤原印刷株式会社 東京支店
東京都千代田区神田小川町 2-4-5

Jimbun Gakuho No.519-12

Not for Sale

Published

March 30, 2023 ©

by

Editorial Board of *JimbunGakuho*
(Chief Editor MINAGAWA Masaki)

Tokyo Metropolitan University

Minami-Osawa1-1

Hachioji City

Tokyo, Japan

Printed by

Fujiwara Printing co.,ltd.

Kandaogawamachi2-4-5,Chiyoda Ward,Tokyo

THE JOURNAL OF
SOCIAL SCIENCES AND HUMANITIES
(*JIMBUN GAKUHO*)

No. 519-12

Chinese Cultures

- Manchu Language Skills of the Eight Banners People in the Middle of the Qing
Dynasty : Focusing on Qianlong Emperor's Direct Teaching
.....KOMATSUBARA Yuri 1
- The interpretations of “*cha tang*” in the Manchu works translated from Chinese
..... ARAKI Noriko 17
- Verbs related to “茶” in “*The Dream of the Red Chamber*” LIU Miao 27
- Chichibu Kotaro Who Taught Chinese in Manchuria And his Lectures on Broadcast
..... DAI Ke 47
- Children's Magazines in the Republic of China period and *Kodomo* (コドモ) ,*My
magazine* SASAKI Makoto 67
- Annual report of the department 95